へ13
2944
18

へ13
2944
18

昭和九年
七月九日
購求

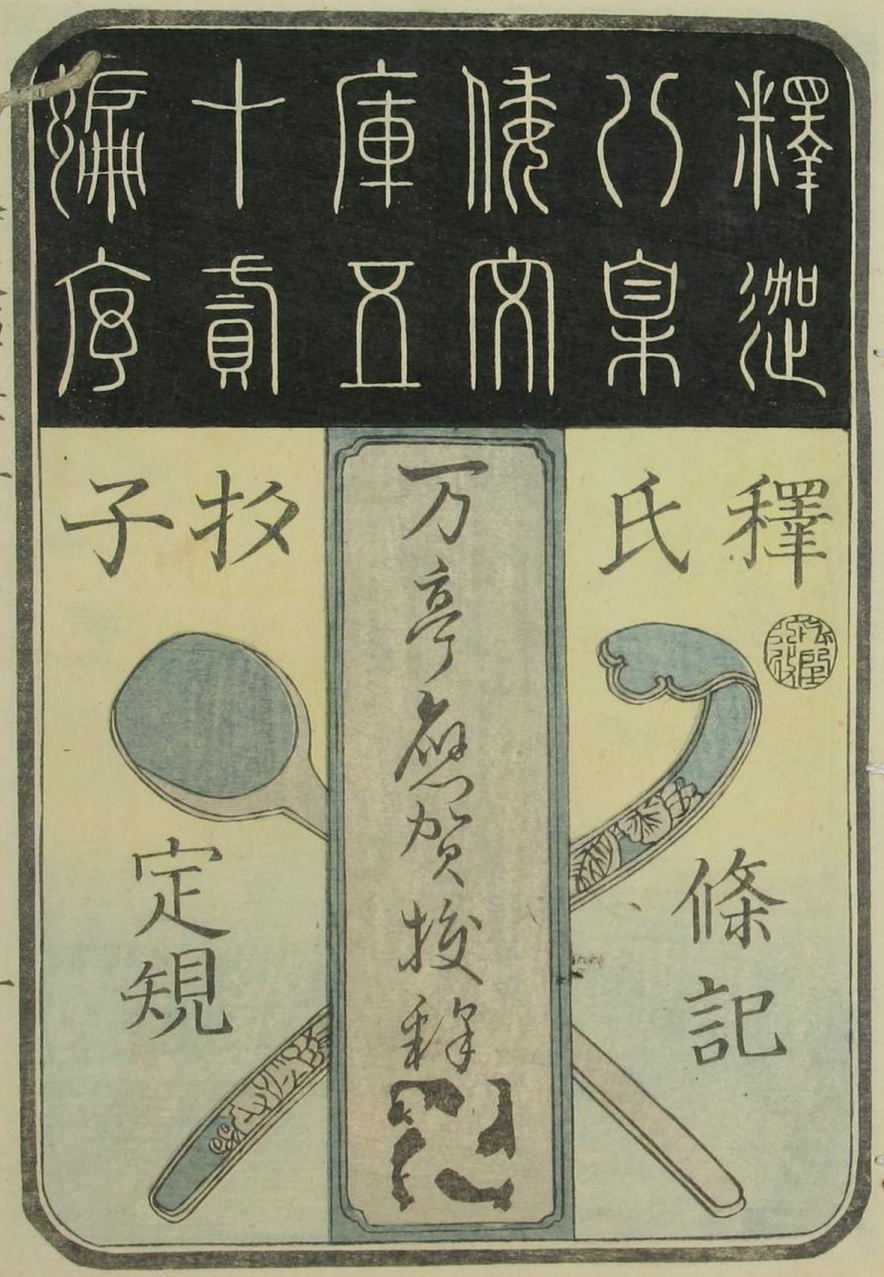
白粉の善悪を考る法

新しくぬる粉に油のたき品を水にてとくれを用ゆるあり

粉ろ皿を火に焼て見るにてきこのごとく鉛白粉あるは上品あり

又焼て色の黄赤を帯るは上人焼て色黒くぬいまを加へるは下品

万亭應賀作
一壽齋國貞画
倭文庫五拾弐編
上州屋



桃の節

蓂の邪鬼を
十二月晦日 さらふ術

東南へ伸る桃の
枝を切りて
門として居宅の
四方地へ打込置
翌年中の邪鬼を
悉く禍宅桃厭の術と云あり

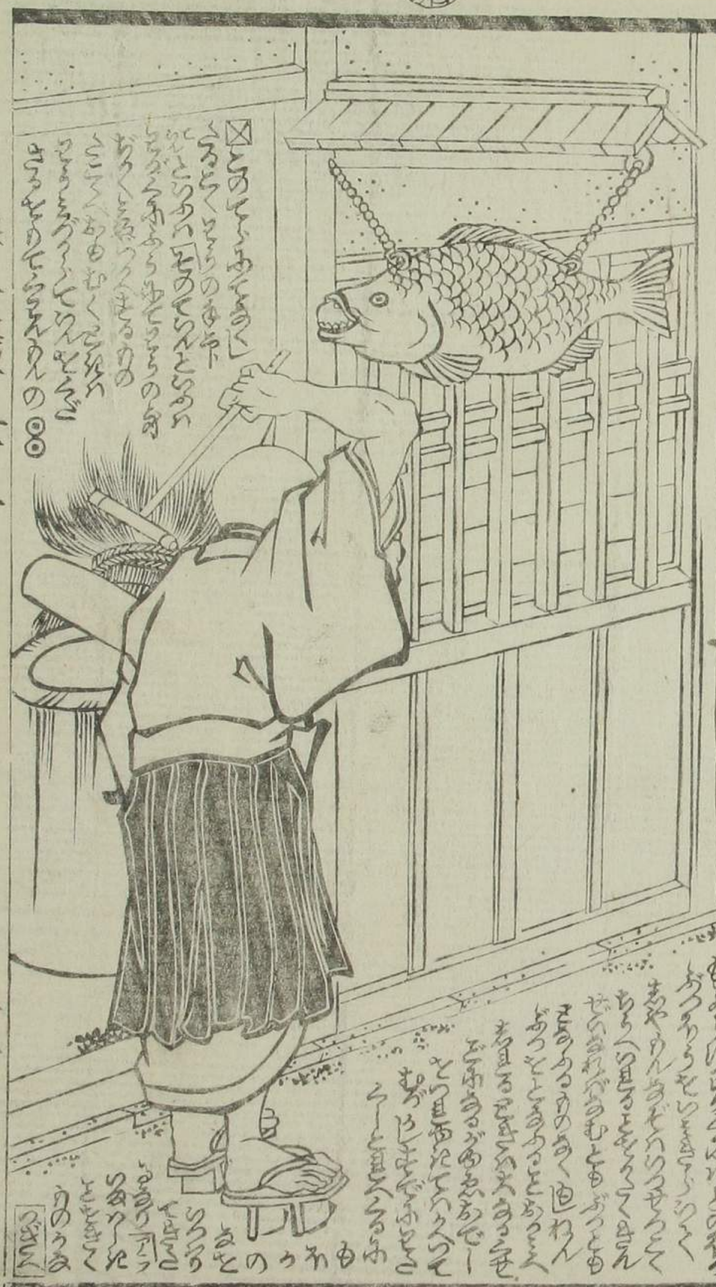
目蓮の母青提女大惡心ふて三宝供養の貨を以て鳥畜類を買求め自殺して肉を盛獨吠樂ふ耽りて五百僧齋を勤ると雖已あらば反て衆僧を害せんと計る大罪に仍て遂ふ阿鼻地獄ふ墮る

目蓮家を出奔して后河羅漢の成る吏を聞傳へ其妻祇園精舎に來り凡情を述べ俗家へ連還らんを目蓮神通をもつて人間の四苦を現し愛執を絶む余り豫め禪秘要經の依説

金

沙波撃ハ銭の上

應賀作　國貞画



つぎに さても[illegible]

[illegible] 悪毒王 [illegible]

月蓋 [illegible]

[illegible] 五百人 [illegible]

[illegible] 牛馬 [illegible] 牛 [illegible] 山 [illegible]

[illegible] 金 [illegible]

金
力

三

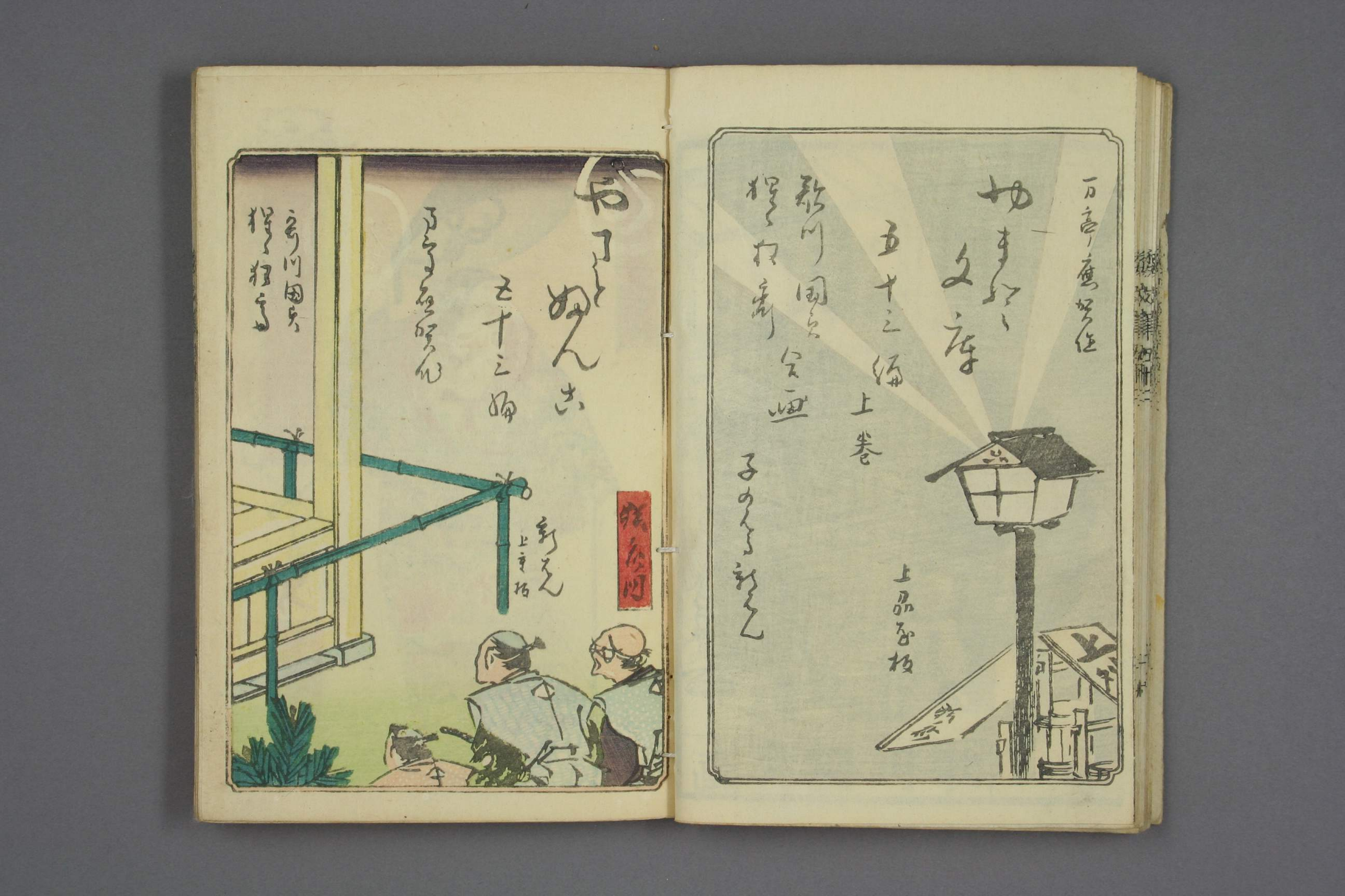
百年よのちぐ
いきをし
なきいきぐ
らいたくてぬと
やふうあるよを
人い五六十をうるる
めのうりこのうえ千
れんすれんいきのびさ
きるこもとをそんのよせ
といふことをいたとのーやむ
うるるくのくみーひたいく
やぐうもあのをまあぐるまちさそに

戸陀

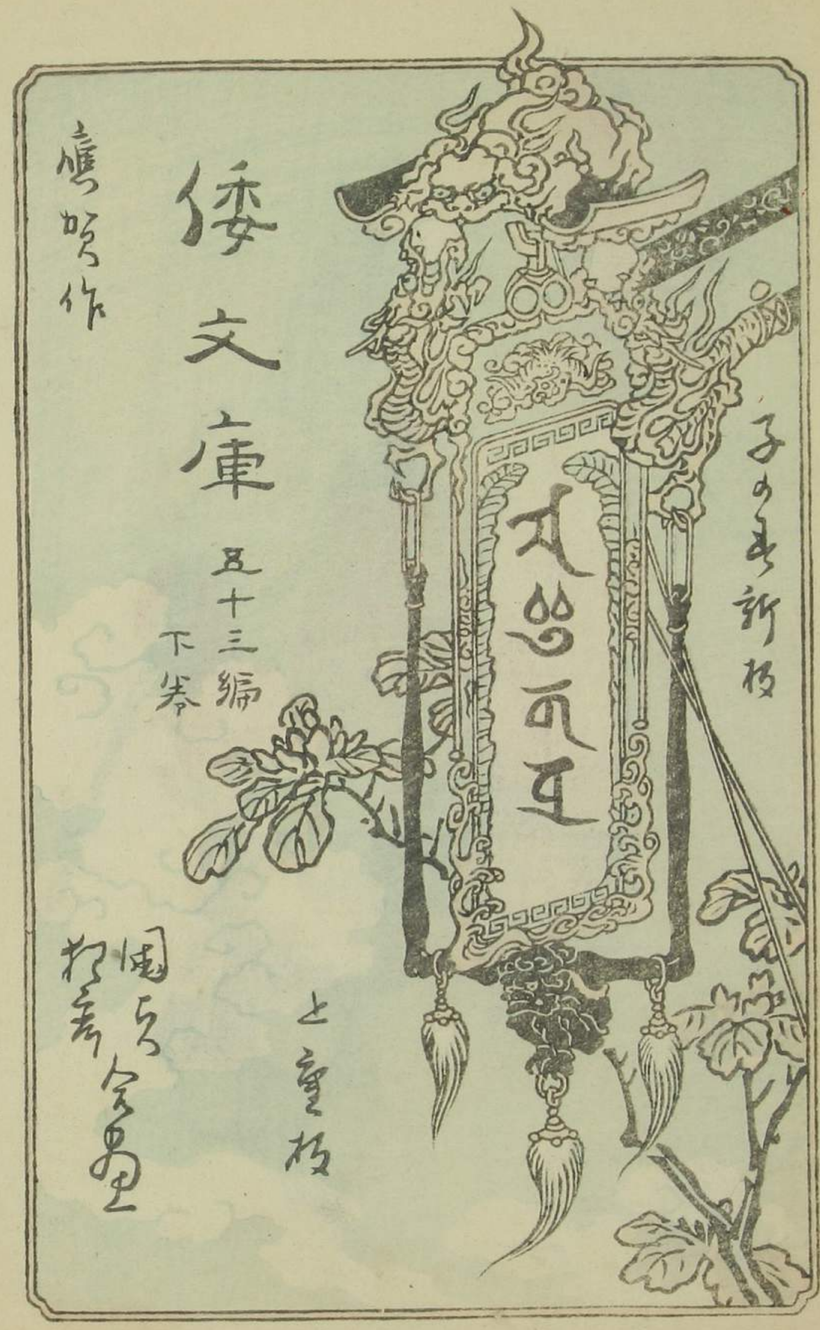
大象

從是西十万八千町象飼場界
毘舍離國
月蓋長者

万亭應賀作
槍
一沙門の北華
一切國中
入魔ろう
あめや
月日
傭書
交來
歌川國貞画
新編朝日譚
三四五編


五十三編
上品堂板

上
下



釋迦八相倭文庫第五十三編序

夫速疾立驗摩醯首羅說阿尾奢經を引翻て名を迦樓羅い可也ゞゝ赤華那羅延の香醉あらゞ香商人り擬ち蚊摩訶半陀の一段い經顯を狂言ゆゝく槃特ゞゝ盈休あく中途般陀の說ル有ど善見物の律ぎゝい增一阿含の欠あく見ば眼の德見附柱世界の舞臺を覚る時い凡ル智識の匹掛木火土入並水働く囃子方ゝゝ行を支るのゞ赤ゞらうと例の能あゞ序の舞を云吏ゝり

文久四年
甲子春

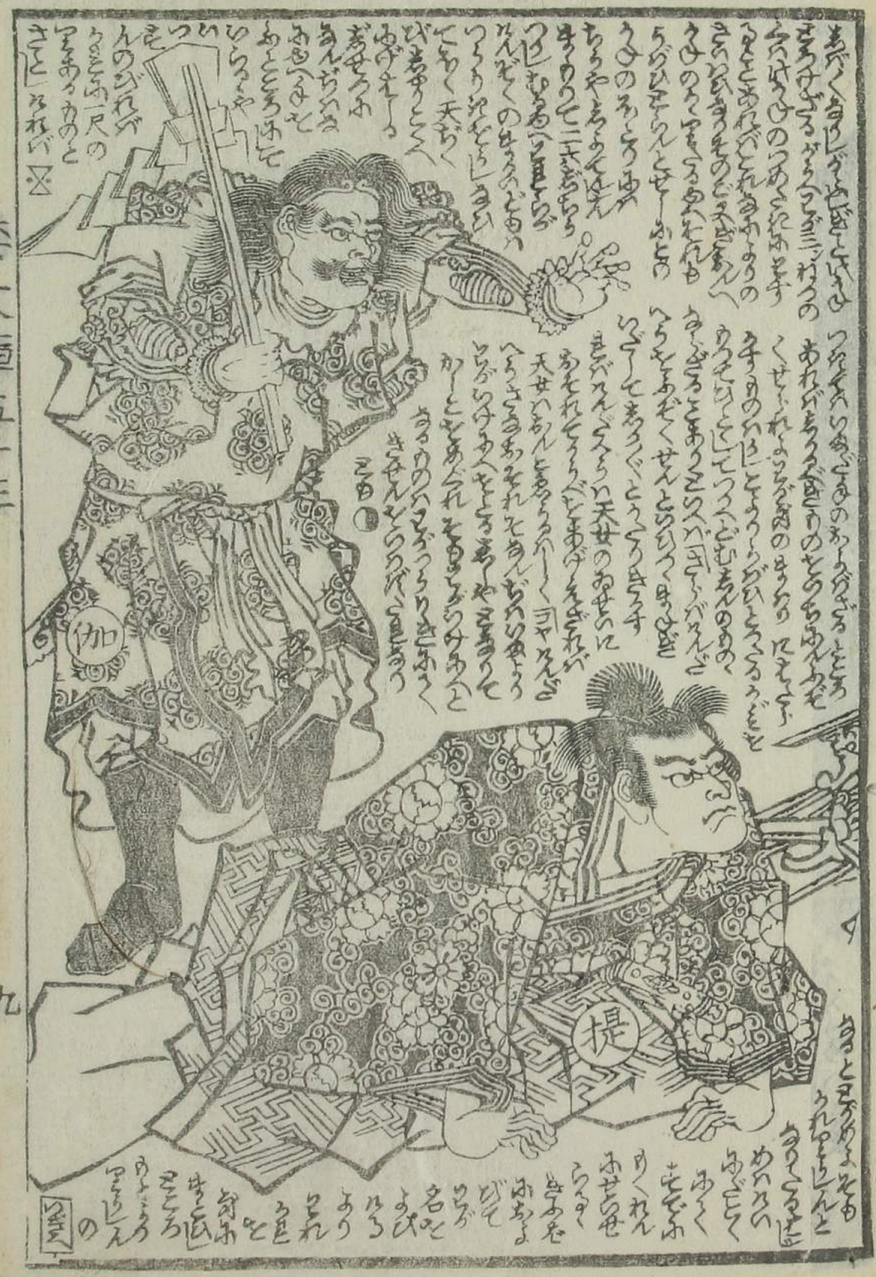
南花堂 万亭應賀誌

善愛女
伽留羅提舍提婆の命ゐうけて阿尾奢の法を行ひ摩訶醯首羅を祈りて善愛女を
伽留羅提舍
よび灸医竜王女を伊婆那國の大殿に寄る
灸医竜王女
提婆達多

増一阿含經曰
爾時尊者槃特告爭朱利
般特曰若不能持戒者還作
白衣時朱利槃特聞此語已
便詣衣桓精舍門外立而墮淚
善見律曰
炭燒の夫
槃特
千金の
栴檀香を
炭にゆいく
筆と
易る
呪摩訶般陀心自念此人
於佛法無當遺還家
即語周羅般陀言
汝今鈍根即牽袈
裟驅令出門於門外啼
哭不欲還家等
富留那著闍崛を
出て摩伽羅山麓に
於く轎曇弥尼の
造罪の霊を度し
又摩訶般陀の智戒を
進て祇桓精舍へ赴く
富留那尊者
漁父霊の
周利
槃特

山神
岳の名

提
竹口



應賀作

摩訶般陀 周利般特 兄弟の説

法華經授記品佛本行經增一阿含經補注名義集毘奈耶大毘婆沙論谷響集等ゐ説ところまちまちゐ或ハ同名或ハ兄と弟とゝ不明

▲とあげてまゐる イデ

▲ゆめで

▲ゆめ

▲ゆめ

▲ゆめ

弟を小路とものふ毘奈耶ふい
父を波羅門にて前糸の説
こゝ大に異あり小般特
の愚鈍ある過去の業
因のくさぐい
本起經の説と
引て後編の本文
ふくん〜〜く著さぐ〜

三段●ものかうあんあいかう口「イヤ
ありそふこと見ゆるあんあるがあるたとどうぞ
ぢきる●「そんなぐがきくつてぐざる口「見いそんぐ
よふあるでゆつさてびとんまいぐのあめて色らあるの
●「されいそてびとんまいぐのあめて色らあるの
ぐ〜やとく〜ちゝのうあくうあされてぐざる
口「そもとらく〜どまーやくあさとぐざるく
ヤアちゝ弟ちらーやあるうもんそくふせんそくと
ちあ〜せの●「イヤせんそくいとくふらい
●「そのぎふんそくひとう
どうんでとさまびぢる
ぶんいく子ことぐざる
口「そもきうふびまづ
ちきろぐのぐんいうと
ちるそろぐんとのふ
めのをうふいれびうくぬ
をぐ〜ぐざる●「いつゆも
あくとあくびうふひも
いくそうぐそろぐんと
いふものいいやーいめで
きゆんいまゆもさくぬ
めのでいどざてくぬう
口「とまいありひも
ふ〜ぬとそもひとて
あそふうきうくわび
あ〜ぬ六ぐいがどぢる
その六ぐいのぐんいちへ
礼れぐ
どぢる
●「それいい
あぢきと
とするぐ
とぐ〜ぐ
どぢうう
口「まうあ

いくふ〜〜ぐざる口「ナニせんそくとく〜ろう
いくふいくふ●「いつふゆもさんせんをひとぐ
そちくあわせんまーゆいさぐゆてあめめ
うくえまうふびうゆやうやあるてうーグ
いでまうさゆもまんふくとゆあてあとうをを
いくとあまいせんちくいひとうあゆもまつく
ことでいいぢ〜ぬ口「ア〜〜〜とれいいうこと
せんをくとまうチいあーを
あうふうぐのことぐざる
●「イヤさゆうふうちちうさを
うあぬせんそくとぐざまいの口「ハテ
そちくうさをくうあぬせんそくとふ●「さまび
そちくうさをくうあぬいひぬぐ〜ぬとを
ぐざる口「いつさぬ●「そりやくそちくうさを
うあぬせんそくぐ生くうぐざうくうをー
あゆーどそくいでまん●「そまいうにけ
ちの口「あーをあいうくうとうあ〜〜〜
しめ●「ところえ生ーこと見いくふ
とうあちふあうくぐざる口「さそさうそくふ
さうちとこうぐざるうんぢいうあぬ
あんぐんつまでぐざまび●「とれく
ふはちいうふ〜そくとくいあんぐんぐ
ふんをくぐぐざる口「イヤあんどんさまうしてこと
ふをこのちあんぐんでいぐざ〜ぬぐちめうまの
のでうあんのいちげぐふあぐ〜ぬふあうく
ゆありぐうけふすこくうりういのことを
あうへれびうふぬぐそ見いさくまんでありやうう

つゞき●「イヤそれがしがかへるとき
ごのめいさんでござりまするを
あめのふりかゝりガチヤ〳〵〳〵とまへ
ござる口「とりく そろばんを
おあるしもの ●「それは

てんぢくさまとの●「こ
やつとまことおもくらいを
そのたいひいさいぜんうんぢが
ござるまで
●「イヤとまでござる
●「こゝもほんとう
●「イヤやく
火のやうにあつくとまりまする火をとあめす
●「これはまことうそぢやれ
●「とまの ふまふやひと
あなたやひとく

四段

▲これハこの
あさあさくのちやう
しや摩訶南義と
まうそめのでござるそまどし
あるそのたうらをすつてござれど
けしからぬ人ゟおくろうさるへ
そをうごさるゆゑこのどうろ
おつぷらと印ふがゐるか
いてみてはづしきものら
までとをせもんあれ
もせもんとあせいくるい
みかくまのひとえでござる
まとことせもんの世の字ハ
よのなかのよのーせんいまする
そちそんめうのそんでござれが
ござうでもよのなかのそんなりのがあふれ
まうしてそをもたうくいらられまちせぬこの
くふのそしらてつりもむぶろちやうじやれ
たぶらうさそてくそのをふがらんあぞせを
ござら也しハどんじぶうごんのとことでござる
そ也ふつきいめくあいとこのござ也が
うみてあをてろやむらいくて好若梵士
あのうくへまあわりてあのくうけくあ
わりくさをとこのござ也がまづそうりく
とまゐらうイヤまあとてふぐらむ
ぶのハ六万そうのあそめりつせそらんど

六あそんハうらをえうあへむせもんとおとと
わそろうくひとつぐのうぐへうちうくめの
あどをねぐろとこれどぎうふ扨イヤあゆみを
まうら手すちまちそやと也ハうらくぶのく
おやし自すぐどぎるまぐとあおまのうく天
まぬらうさうえとうもてがおゆハのめんじや
がふく〳〵チト　どあれあのいうのとます
まうきあんちやうじやでどぎうりまうそも×「イヤまう
あんであうりやらがあんぞあんあのゆあうおぐよ
らうとどうちへまいのやあや且▲「さうらがあゆうされ
あゆみそく去いでやつぞ▲「さ且べチトあね
がひがゐつくまゐりまし　がと且へらそく
かひがそうふのあつへひつとんきぐあめのまうく
まし且がちやうめとあきぐいであしくとあらは
ござらくあまのそちらさんくや▲「ヤレくう匠け勇
ござるものやのんどのあふうりまでらでゐしそく
ゆハよのくぼりのがござりまするや▲「されバこのやうへ
こまりじや▲「さればそのくまのハあすつくさあぶうさ
ゞーのらふどもどうもてそでん世ゐのとらくどぎうとどせ
どぎうりまうすや▲「と且いとやあきのとこうぐどぎうま
てんちのうくへちうひそくあんぢういそとそとそ
あんとと且そぐいちくらびぞうう▲「いであまもあもく
でもどぎうりまう世ゐアノせそんめが×「ジイと去ぐゐ
まのそつとさてゐめ▲「ハアヽ×「それはぞうぞうちくく
ゆがうそいのらんでもが　ひぐあまのゆちそ且ぴ

つゞき あいせんはてせをとくあんのへあの
みのふあのとせるつもとこのはまへまへ
えんもやうりもまれかのへとあいちりう
そどこすにられやあるころとくいでませと
めんの戸をきめはうてごされがそのくち
めんの戸へうくのどことれかつてものを
ちうりつけまーくうずそ見ぜゆへよあ
まぜぬせ ×「ホ、又そあちよおさ見まく
ござりませ ×「ホウとのうれつけは
ちござれゞござとある ▲「チニうござのござと
ござりまする ×「あわく ▲「そのその
うぞうのくきこと申ます
かまとみまぶうきこそござるう
あなうゆうそくござるう
×「イヤうきこと申もらしく
本のきるうれでいござるぬ
あんぢお、うつうきとたく
さんはらてころへてあのれ
もふあめをどうちずひとりゆも
あどこさあとのことをそー
つくこときぐござる ▲「それ見れく
ゆくいかつゝでござるうろいへめをと
うへーくやりていあのでござる
×「イヤそれ見ゆれよのいとてござる
まくらさんのふかとのまつそんざ
といふうあきてうさとまつくると
そうるまとわれやけのくうのが
あくれまりますれ ▲「とれ見れいちづんの

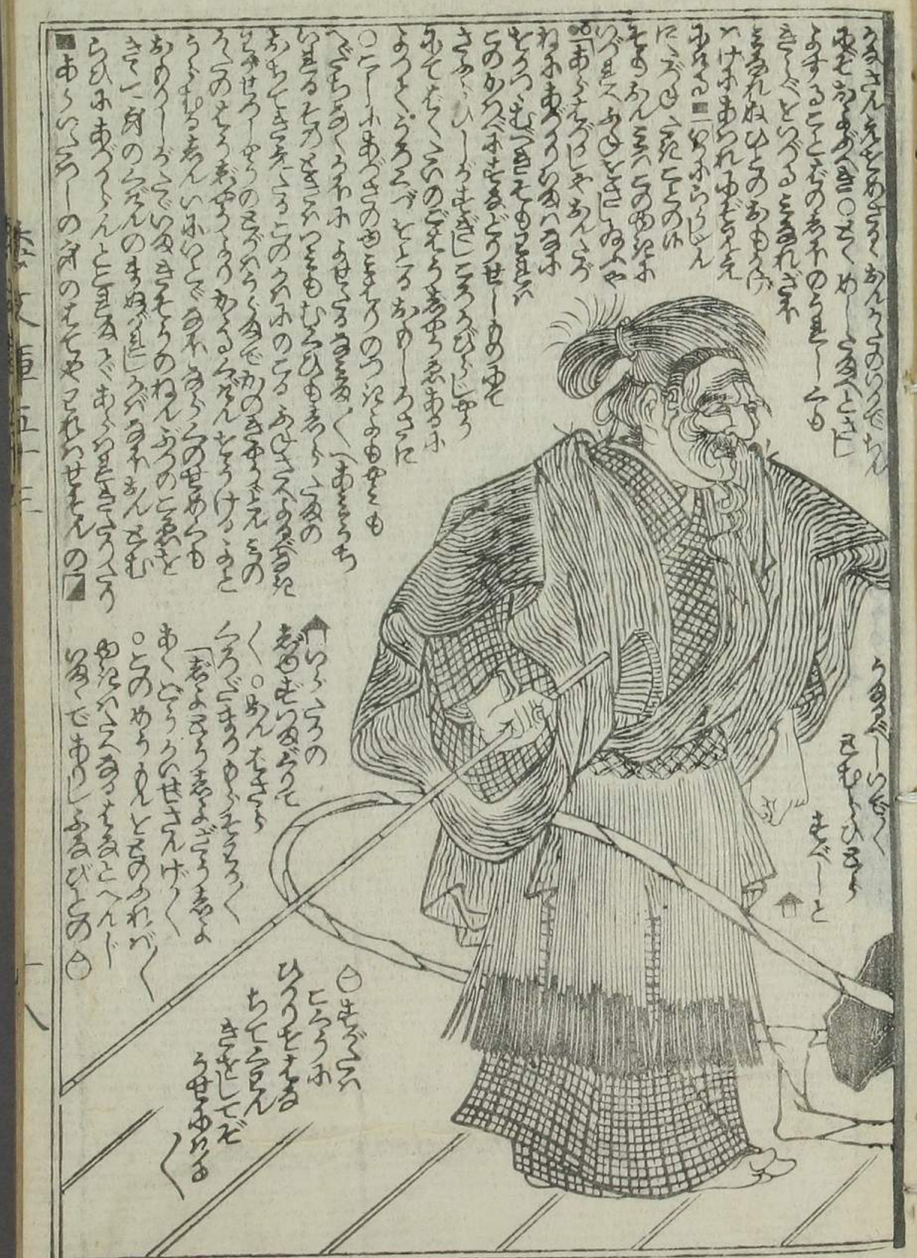
あらへーでござるおまはゞござるそとく
まするうか ×「ヨテーいはぬふえんのかすつう
めされの ▲「とてうえまーさそもく
そくのころとてそござる ますきちっと
いそのさぐまするうへイヤこいとくの
あやくゆんのうちまへもかゝうくどの
わどのそゝくがくさうちのあのうれ
まうこともる 主人あのやうきおかくぞうふ
とうつのれさくゐらうへさまざうちでかに
よのめるとあめどうへホヤイヤおふろと
まうすろちやをとみでまうくさんの
ふかどでござる

五段 ▲「いつふとのやのうちへおれまのまう
●「あるふびとあさうそーうよさまぜ ▲「まうてちんござ
どまふきぐござるう ●「イヤとの四五人をまそ
ござりまする ▲「ようふべそ見く生くらう
●「さそゆうまとーやあれあのらがちがゝうて
ござるれ ▲「のゝくそことあのひとはあうてへいう
らゆうくあのまどうとあまうでこうまうちんべと生う
▲「いつゆをとるのそうくござる ▲「そ見」とのせ四五そ
きれをあのやくて ●「そこぞおまうるでござるぞ
うふろんねをいふさとあと」のそーちくござる
いうまことら人名ふうけねがらるあのでござる ▲「これ
めのきうぞとてさんもとゆくてふござる ●「あのうをあ
てみへぞうりでござれべそるぶんてさんでへ
おくゆめとあゆふうきまう ▲「とれれくいうと
よいうありでござるべあらんぶまうもとめう
とくのまゝうぐの生ちへめつくあうやれのとゝずねぞんよふ

◇あと めく よろ まで ●「それわうさ どけ うき ござる さうぶ あす あつく まぬる わござ ふよめと めさくぐさ されい ろさく ござる ●「およ あつくり まきき まい

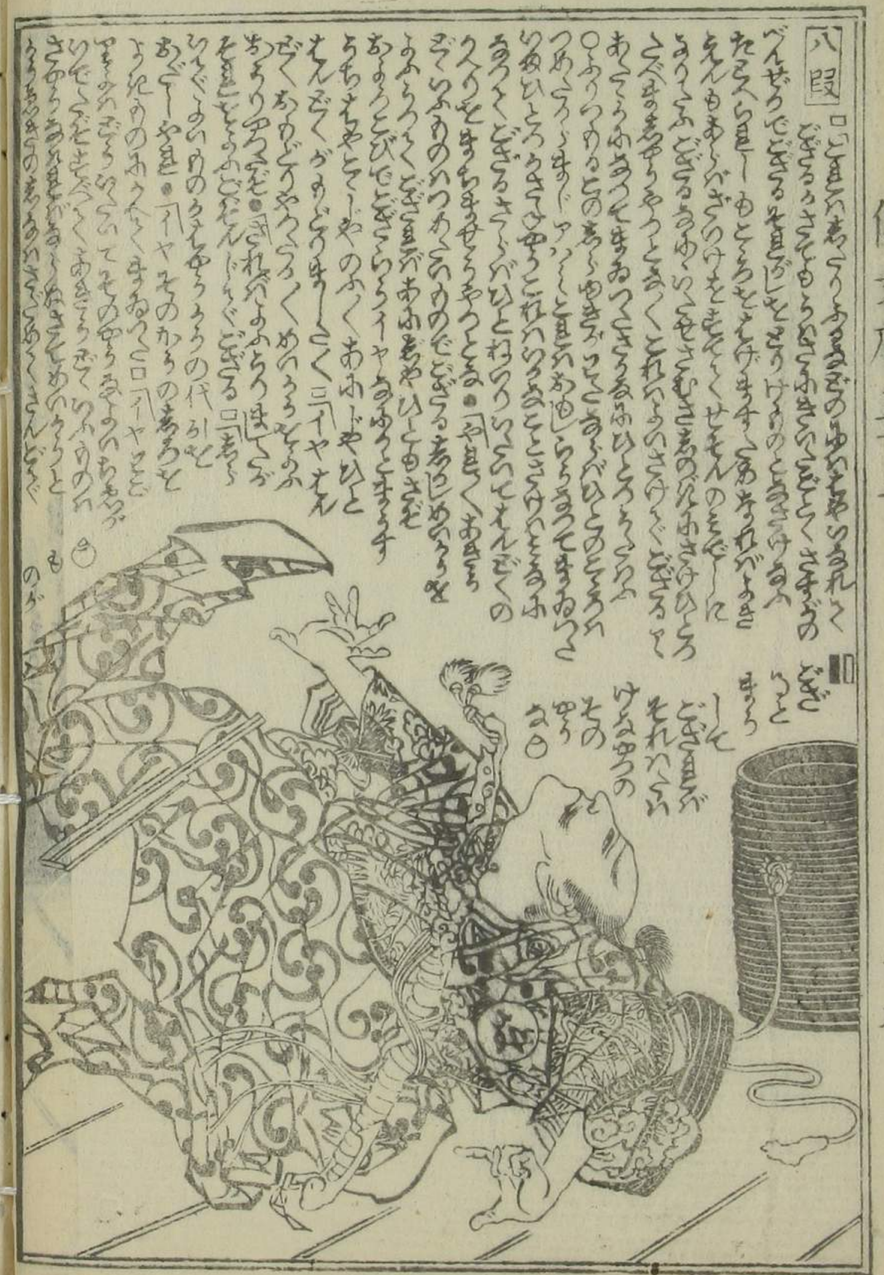
▲「これそもうゆくと もちてそござる ◇さうぶからそのでゐくらち

六畳



七段

八段



万亭應賀作

惺々狂斎画図

倭文庫五拾四編
錦重堂梓
上
万亭應賀作
歌川國貞画
下

あつめぐき

夜話の絞法

一名地の夜話

絞あそこの色うるゝ間

撓めあぶりしる代

ぬりつけ手ぬぐひ

うんどんの粉を

ふりこのあそこ

ちゝほ一つあるく

ゆみあとをば

あそこも始めおつる

釋迦八相倭文庫第五十四編序

此世界の衆生ゞ豆ふ擂ハ彼岸の豆煎の如〳〵去バ堅き豆を噛ハ

神ゆゑ陽あり噛て解ゞ是佛ゆゑ陰あり其和きに原づいて老少

の歯ゆ合ゆゑ堅き豆を除ねばゆゑぬゞ豆入ふ豆の無ゆ異名ゆの故

煎種中へ梵説筆豆を法録ふ書校て既に阿鼻の黒焦とする亀

滋國の惡毒王を滋ふ北天の王ふ擬ひ妙法蓮華經の三僧を南無

帰命頂禮と做ゞ更ゆ芳き甘味ゆ翻て半煎の腥ゆ化ゆゝむ

一条宛穿らゞ一夕の茶うゆふ唯一抓に呑込バ腹の中ゆゑブツくと

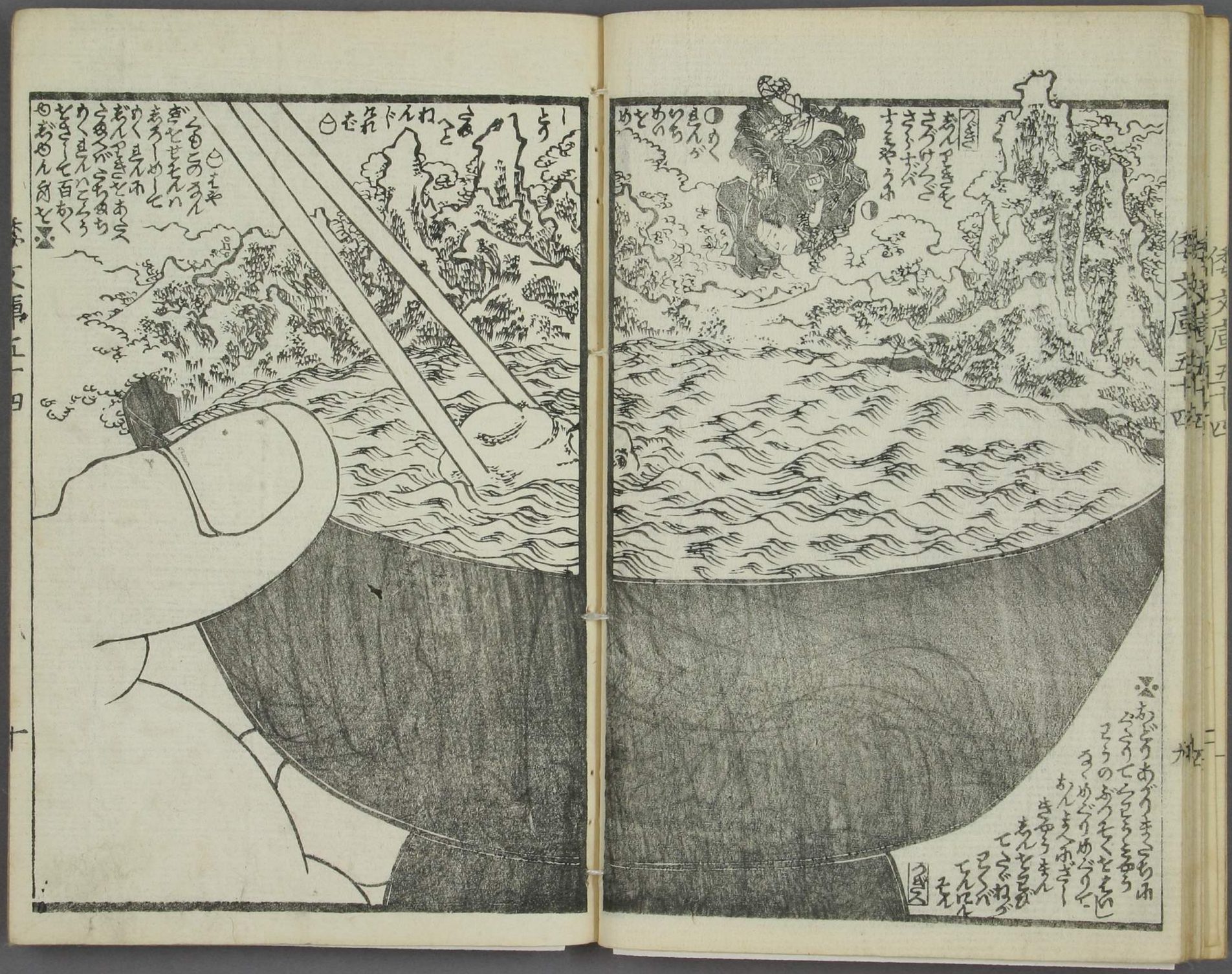
佛めくとゆ可有也

慶應二寅春

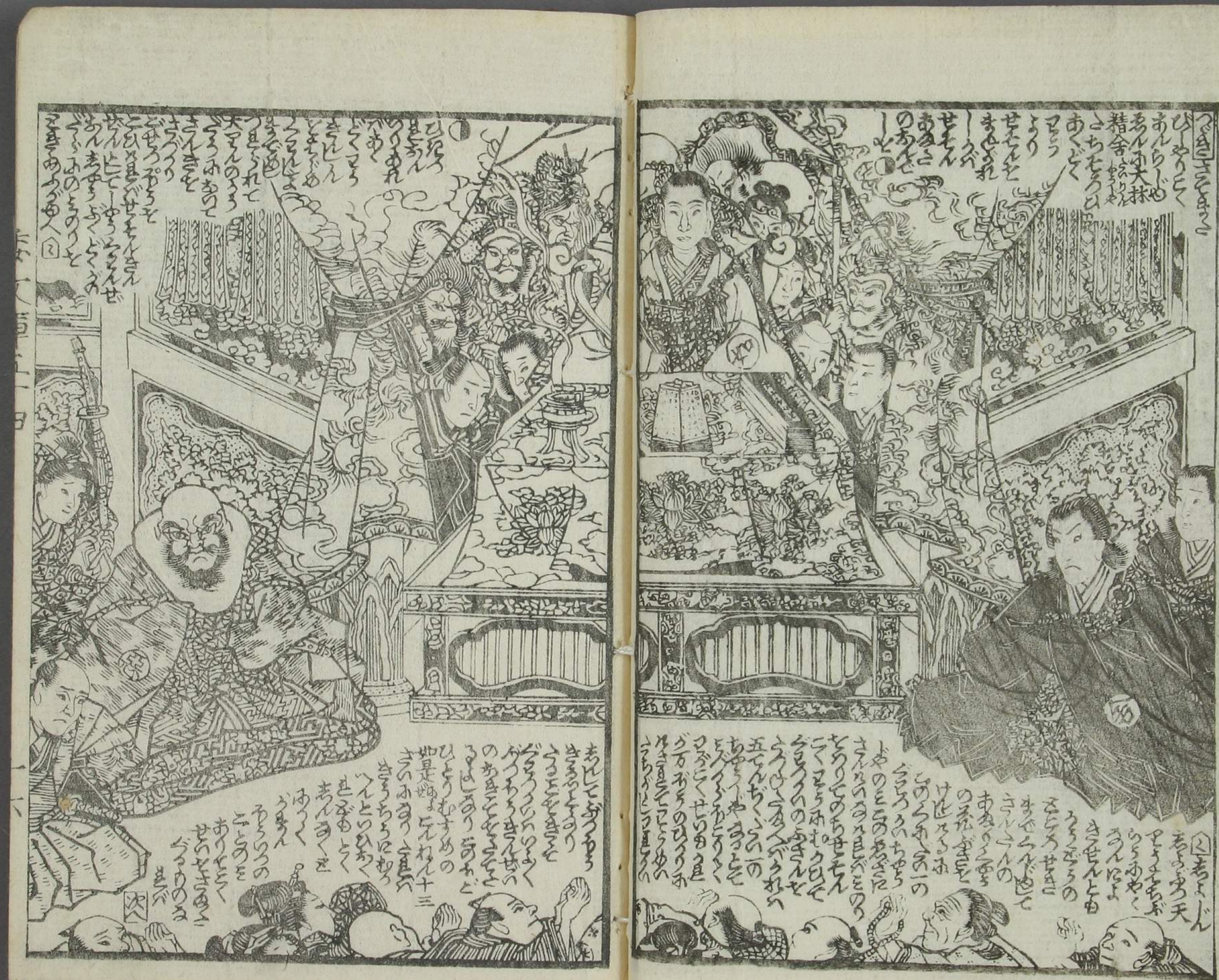
万亭應賀述

北天竺毘舍離國
惡毒王六字妙文
を唱へ功德に依
て五逆十惡乃
大罪を免る

月蓋長者の一人娘如是姫
羅睺羅尊者月蓋の家を托鉢す



万亭應賀作 歌川國貞画



万亭應賀著　一壽齋國貞画

集州　書物は溜の深さるを去法

一大なる桶りあるを用ひ
清水をゆし　こなしく
うしろに書きたる
書物の表紙をこなり
そなたみまひらして
溜をはぐし
上下ともに水をまきて
みを書がりうへわしく
のもつ打ぢんまを打べし